

あしたに 紅むる春

山根優一郎



ルック社

あしたに駈ける青春

¥ 450

昭和47年11月30日 初版発行

検印廃止

著 者 山 根 優 一 郎

発行者 田 中 更 生

印刷所 愛文印刷株式会社

発行所 株式会社 ル ッ ク 社

〒102 東京都千代田区麴町4-5 第8麴町ビル
電話 東京 03(265) 9571 (代) 振替 東京97045

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします 0076-0082-9000

あしたに 駈ける青春

山根優一郎



名作
テレビ小説
BOOKS

ルック社

あしたに駆ける青春 目次

第一話	友よ、日はまた昇る	5
第二話	栄光のデモシカ先生	33
第三話	潮風のふたり	59
第四話	気まぐれ人魚フンサイ！	85
第五話	俺たちの星はどっちだ	111
第六話	青春のいちばん長い日	137
第七話	俺と結婚してくれ	163
第八話	今日の涙にさようなら	193

脚本・山根優一郎

管野 昭彦

才賀 明

石森 史郎

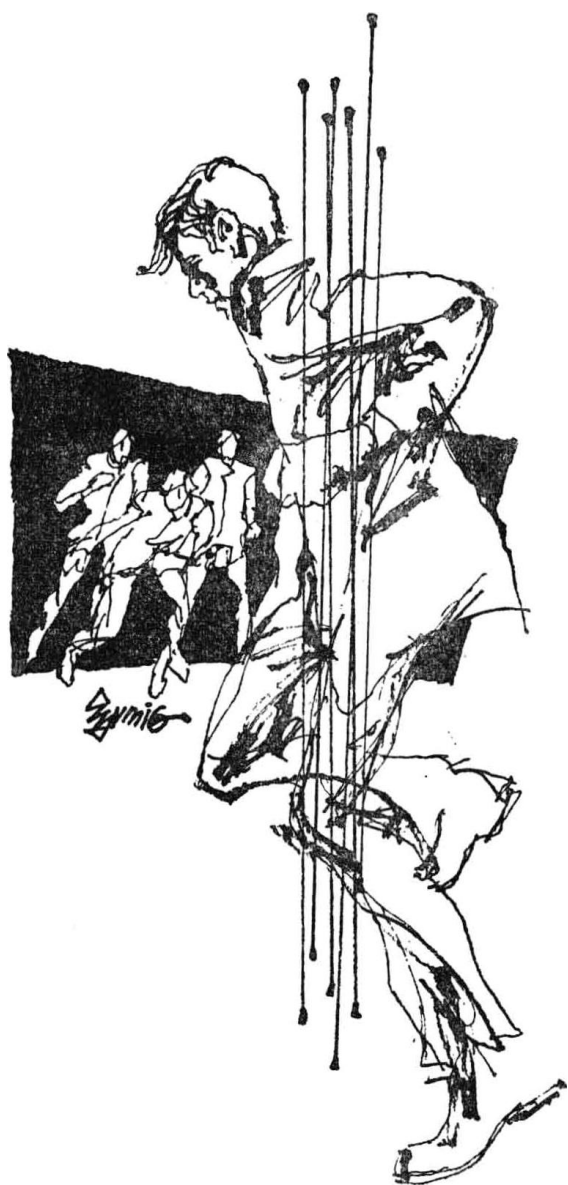
加瀬 高之

小説化・増山 敦男

伊藤恵美子

さし絵・小泉 澄夫

第一話 友よ、日はまた昇る



ここ、海に近い泉高校のグラウンドでは、ラグビー・ボールが立てられ、ラグビー部のキャプテン・青木洋介は汗と泥にまみれた顔でジッとボールを睨んでいた。チームの一同も観客席の応援団も、一瞬シンと静まりかえって固唾をのんで見守っている。洋介は、キツと唇をかむと矢庭にダッシュし、渾身の力をこめてボールをキックした。ボールは青空へ舞い上がり、きれいな弧を描いて見事にゴールのバーを越えた。

「やったあ！」

「逆転だア！」

とたんにワァーッと歓声が上がリ、泉チームの面々は躍り上って洋介に抱きつき肩を叩き合って喜んだ。観客席では、同級生の秋山千恵、川上ゆり、野村エミ、広田春代たちが、ノボリやプラカードを振り廻して大騒ぎしている。そのそばで、校長の近藤と担任の稲垣が、もう勝ったも同然だと満足そうにうなづき合っていた。そして、一きわ高く泉高校の応援歌が流れた。青雲高校応援団も負けじと、太鼓を叩き手拍子で声援を送る。

鋭いホイッスルが鳴り響き、両チームはガッキとスクラムを組んだ。ボールをすばやく山中が拾って走る。必死に迫る青雲ラグーたち……。次の瞬間、山中はタックルされ、惜しくもつぶされてしまった。

「あと三分よ」

心配そうにゆりが腕時計を見ながら言った。

「ここでダメ押しが欲しいわね」

「そうね、何たって青雲は県下一なんだもの、油断はできないわ」

エミと千恵は、試合の成り行きがあやしくなってきたのでハラハラしていた。ベンチに座っている老部長の佐伯竜之助が、急に手を眉から鼻、口許へと動かしてブロックサインを出した。それを見てとった洋介と橋田はうなづくと、顔を見合わせニヤリと笑った。レフリーがホイッスルを吹いた。パスを受けた洋介が走りだすと、橋田も俊足を飛ばした。青雲選手をかわして、洋介は橋田に素早くボールをパスした。それを受けた橋田はボールを小脇に猛然とダッシュした。それと知ってあわてた青雲の選手が橋田を追った。その差がだんだんと縮まり、橋田は三人の選手に飛びつかれて、よるめきながら振り放そうともがくが、更に飛びかかった青雲側に殴られ、蹴つとばされ、遂にボールを離してしまった。転がったボールを青雲の一人が拾うと、猛然と走り出した。アツとなつてそれを追う洋介たちの間を、青雲は巧みなパスで逃げる。洋介たちの必死のタックルも空しく、青雲の一人が遂にゴールヘトライした。

ワァーッと歓声を上げ、狂喜乱舞する青雲応援団……。と同時に試合終了のホイッスルが鳴った。茫然としている泉チーム……。

「チキシヨウ！」

洋介は口惜しげにヘッドギアをむしりとり、地面に叩きつけた。

校長室では、『自由 規律』と書かれた古ぼけた額の前を、校長の近藤がイライラと歩きまわっていた。そのそばでは、ジャージー姿の洋介と竜之助が黙って立っている。

「諸君、一体なんですか、今日の試合ぶりは？ 県内一の強豪青雲高校に、今年はきっと勝ってみせるというから、私は忙しいのにわざわざ試合を見に行っただす！ それなのになんですかあの負け方は？」

竜之助は、仕方がなかったんだと弁解した。

「勝敗は時の運ですから……」

「時の運？ 冗談じゃない、我が校のラグビー部は五十年前、先代校長の私の父が、この学園を始めた時からの伝統があるんですよ。父は子供の頃、イギリスへ留学してラグビーをやった。だから、父はラグビーを我が校の校技……スクール・スポーツに……」

竜之助は、ムツとして一步前に出ると、校長の言葉をさえぎった。

「坊っちゃん！」

「——?!」

「失礼……校長、私はここの第一回卒業生です。先代校長の教えは、言われるまでもなく十分承

知しております。あなたにラグビーを教えたのも私だ。もっとも、どうにもヘタクソで途中で投げ出したのは、あなた一人ですが……」

竜之助の言葉に慌てた校長の様子を見て、洋介は思わずクスツと笑った。校長はすぐに威厳をとり戻すように胸を張ると、今度は洋介の方へ向き直って、おもむろに話した。

「青木君——」

「ハイ！」

「君はキャプテンとして口惜しくないのかね？」

「勿論、口惜しいです」

「だったら勝ちたまえ。我が校は三年前まではずっと優勝してきた。それなのに君達のチームになつてからいつも二位に甘じている。秋の県大会には、青雲に勝つて優勝しなければ……ラグビー部は解散になるかもしれないよ」

「解散？ そんな無茶な……」

洋介も竜之助も、一瞬言葉がつまった。そんな二人をかわるがわる瞞めながら校長は、

「いや……理事会でそんな話も出ているということさ。私は学校のPRになるんでその事には反対しとるんだがね……」

とつけ足した。洋介はグツと唇をかむと、一步前に出て、憤然として言いきった。

「校長先生！ キャプテンとしてお約束します。秋の県大会には必ず優勝してみせます！」

洋介が何やら荒れた足どりで校長室から出て来るのを、千恵が見つけて追って来た。

「どうしたの？ 校長先生に何か言われたの？」

心配そうにのぞき込む千恵に、洋介は校長室でのいきさつを話した。

「そう……ラグビー部は学校中が期待しているから大変ね。でも今日は本当に残念だったわ。あなたのフリー・キックで勝てたと思ったのに……」

「うん……」

洋介は汗を拭った。汗と土にまみれたその顔があまりにひどいので、千恵は思わず吹き出してしまった。傍の水道のところへ行き、ジャブジャブ顔を洗う洋介に、千恵はハンカチを差し出した。

「サンキュー」

サッパリした洋介は、千恵を見て何やら微笑んだ。

洋介と千恵は、帰りに千恵の母がやっているそば屋『一休庵』に寄った。店の片隅に本田、小杉たち二年生部員がションボリと座っている。

「おい、どうした?」

彼らのそばへ腰かけながら、洋介は不審げにたずねた。そこへ千恵の母・加代が、ザルソバを運んで来て、彼らにかわって洋介にその訳を話した。

「青雲に負けたから口惜しいって……。さっきからションボリしてるのよ」

洋介は、そんなことでメソメソするな……と元気づけるのだが、一向に彼らは乗ってこない。

「そうよ、男の子はサッパリしなくっちゃ。さ、お上りよ。今日は私のおごりだよ」

加代がそう言うやいなや、彼らはとたんに元氣になり、ゴツァンデース! とソバに手を出した。そんな彼らに洋介と千恵は苦笑して顔を見合わせた。その時、奥の方から笑い声がして、

洋介の妹・マユミと千恵の弟・哲夫が出て来た。マユミは洋介を見つけると、

「お兄ちゃん、また青雲に負けたんだって? ダラシがないなあー」

と情けなさそうな顔をしたので、洋介は何しに来たのかと、すぐに話題を変えた。マユミはよく哲夫のところへ宿題を抱えてきては教えてもらっていた。兄貴がラグビーばかりしてちっとも教えてくれないからと、チラッと洋介を見やった。哲夫もそんなマユミに喜んで頼まれていたのである。

「哲夫君、約束よ、宿題のお礼……」

とマユミはいきなり哲夫にとびついて頬にキスをすると、哲夫は照れてまっ赤になってしまっ

た。とたんに本田たちがワイワイ冷かした。

照れくさそうに、サヨナラツと店を飛び出して行ったマユミを見て、他の連中たちが一層ゲラゲラ笑いはじめた。バツの悪そうな顔をしている哲夫に、

「マアマア、哲夫は亡くなったお父さんと違ってモテルんだねえ」

と、笑いながら加代が話かけると、千恵は、お母さんはどうだったの？ と訊きかえした。加代は、ドンと胸を叩くと、若い頃、一休庵の看板娘だったことを誇らしげに喋り始めた。哲夫や洋介たちがニヤニヤ笑ってそれを聞いていた。その時、ラグビー部のマネージャーをやっている西川マキが血相を変えて飛び込んで来た。

「キャプテン、大変よ、ハシゲンが！」

「なにッ？……」

洋介、千恵、マキ、哲夫が、一斉に店を飛び出し、海岸へ走り出した。

海岸では、橋田をまん中に、山中、池内、東たちがグルリと取り巻いて、今にも飛びかかりそうな雰囲気だった。洋介は、その輪の中に飛び込んで、橋田をかばった。

「キャプテン、どいてくれ。俺たち、ハシゲンを殴ることにしたんだ」

洋介が驚いてその訳を訊くと、橋田が低くせせら笑い吐き出すように言った。

「こいつら、今日の負けを俺のせいにしやがるんだ」

洋介は思わず東たちの方を睨んだ。東は、もしも橋田の暴走さえなければ青雲に勝っていたんだと説明すると、池内もそばから、こいつは一寸足が早いからって自分の足にウヌばれている……と口をはさんだ。そして一同は口々に、ラグビーは一人でやるもんじゃないと、橋田を責めた。橋田はカッとして立ちあがると、*「この野郎！」*というが早いか山中たちに飛びかかっていこうとした。*「やめろ！」*……洋介は橋田を突き飛ばした。よろめきながら後退した橋田は、唇を噛むと、今度は洋介に飛びかかろうとした。

「やめて！ やめて！」

マキが二人の間に入ってきて、洋介をかばった。橋田も一瞬、ハッとしてたじろいだ。

「どけ！ 女マネージャーなんかの出る幕じゃねえ！」

「いやよ！ キャプテンを殴るなら私を殴ってからにして！」

千恵は、そんなマキをジッと覗めていた。橋田は複雑な表情になったが、急に笑い出した。女なんか殴ってもしまらねえからな、というやプイとソッポを向いてしまった。マキはホッとして洋介を見やった。

「みんな、山中の言う通り、ラグビーは一人でやるもんじゃない。みんなが一体となって闘うものだ。しかし今日の橋田の独走は、佐伯部長のサインだったんだ。俺はそのサインに従って橋田

を走らせたんだ」

洋介の言葉に、一同騒然となった。橋田には責任はなく、責任があるとすれば、一旦リードしていながら逆転された自分たち全員の力不足にあるのだと洋介は強調した。無言のまま聞いている一同の中で、橋田だけが唇を噛みしめたままジッと海の方を睨んでいた。

「俺はさっき、校長にハッパをかけられてきた。秋の県大会で優勝しなければラグビー部を解散させると……」

洋介の思いがけない話に、山中たちも橋田もギョツとして洋介を凝視した。

「いや、校長だって本心じゃないさ。しかし、俺は必ず優勝すると約束して来た。いいか、皆んな、よく考えてくれ、今は仲間割れしている時じゃない、目標は県大会なんだ！」

一同は大きくうなづいた。『よしやろう！ 青雲を叩きのめして校長をギャフンと言わせてやれ！』……洋介のかけ声で、一同は天に拳をつき出して喚声を上げた。橋田は一人、そんな彼らを黙って見ていたが、急にダツと駆け出した。洋介の止める声に振り向いて、

「バカバカしい！ 俺あ校長のためにラグビーやってんじゃねえや」

と言い捨てると、そのまま走り去った。洋介たちは呆然と後姿を見送っている。

洋介が一人、部屋に寝そべって何やら考えこんでいる。そこへマユミが、父が帰って来たから

と呼びに来た。しかし洋介は返事もせず、寝返りをうって壁の方を向いてしまった。

キッチンではホロ酔い気分の父・雄吉の傍で、母の信子とマユミがお土産のケーキを皿にとり分けていた。そこへ洋介がやっと下りて来た。元氣のない洋介を見た雄吉が、試合に負けたくらいでへこたれるなど叱咤した。

「でも、口惜しいわね、洋介。卒業までには一回ぐらい勝たなくっちゃあね」

信子の慰めの言葉に、洋介は決心したように雄吉の方に向きなあった。

「なんだい？」

「建設会社って、現場の作業員の中には爆弾みたいな連中もいるんだろ？」

「バクダン？」

つまり、使い方によっては役に立つけど、ふだんはいろいろ問題を起すような連中の事を言っているのである。雄吉は怪訝そうに、そんな奴は大学時代にもいたし、どこの会社になっっているものだと答えた。

「前から気になっていただけで、ラグビー部にも爆弾が一人いるんだ」

洋介はポツンとつぶやいた。マユミが興味深げに前に乗りだして来たので信子は慌ててマユミをたしなめた。

雄吉は、ジツと洋介を覗めている。